
逆転裁判～嘘と真実～

湊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆転裁判〜嘘と真実〜

【Nコード】

N8807A

【作者名】

湊

【あらすじ】

数年後を舞台にした成歩堂法律事務所。あの逆転裁判のファンフィクションであり、続きの話です。

プロローグ（前書き）

この小説はCAPCOM様のゲーム【逆転裁判】を元に作りました。予めプレイしていただくと読みやすいと思います。また、そうでない方にも読めるよう努力いたしました。が、読みにくい場合はご了承ください。

本作品中に登場する裁判の進行・法律などは元の【逆転裁判】に準じています。

ブローグ

僕の名前は成歩堂龍一、弁護士だ。

この弁護士バッヂをつけてはや5年。やっと名前も知られてきた。しかしこれは僕ひとりでは無理だったと思う。その人たちについては機会があったら。

さあ、もうすぐ裁判が始まる。

第1章【新たな逆転】裁判パート・1

はあ はあ

くそっ！なんでこんな目に！！

コッ コッ コッ

！誰かが来る！！！！！！

「今日も疲れたッス。帰ってソーメンでも食ッ
ドンッ！！！」

男は曲がり角に隠れ来た男を突き飛ばし、男は気を失った。

そっだ 全てこいつのせいに クックックッ

4月21日 午前9時48分
地方裁判所
被告人第2控え室

「もうすぐ始まるな。」
ぼくは裁判所に来ている。今日は依頼人の審理があるからだ。その

依頼人は

「もういやッス」

肩を落としているイトノコ刑事。

「なに言ってるんですか！必ず助けてみせます」

彼は系鋸（けいさのこ）圭介、刑事だ。敵ながらあっぱれな刑事。いつも事件がある度に会う。いつか味方になってくれた事件もあったっけ。
今回の事件の《容疑者》だ。

「オレは殺してないッス！誰かが 誰かが自分をおとしいれようとしてるッス」

「じつは 昨日別件で忙しくてイトノコ刑事の調査あんまできなく
」

「なっ、なっ、なんスとお！！あんた最近有名になったからって調子のりすぎッス、天狗になってるッス！」

「いえ、そうじゃなくて」

「どうせ自分のことなんかどうでも」

『被告人！直ちに入廷しなさい！！』

「ほらっ！呼ばれてますよ」

「こらあ！逃げるなッスう」

ははは。参ったな。

少しここで事件を整理しておこう。

事件はいたってシンプル。ある路地で事件は発生。人が2人並んでギリギリ通れる道で起こった。被害者は児玉 高志、大学生。腹部を刺され死亡。第1発見者により通報があり警官が来たところ、屍餅^{シメツ}についていたイトノコ刑事がいた。そして凶器にはイトノコ刑事の指紋。その場で現行犯逮捕された。

とにかく最初は情報を集めるしかない。それから一気に攻めてやる！

4月21日 午前10時

地方裁判所 第2法廷

ざわざわ

カンッ！

裁判長が木槌を叩く。

『これより糸鋸 圭介の審理を始めます』

「弁護側、準備完了しています」

「検察側、同じく。成歩堂くん、ひさしぶりですな！今回も遠慮せずにドンドン来なさい！」

亜内検事。外見はどこにでもいるおじさんだがおそらくベテランだろう。相手は僕を知っているみたいだけど、僕は知らないな。

『では亜内検事、冒頭弁論を』

裁判長。他のひとの言葉に惑わされるあいすべきじいさん。でも最終的に正しい判断をする賢い　？　ひとだ。

「はい。今回は証言、証拠ともに被告人だけを指していることを立証していききたいと思います」

『わかりました。では事件のあらましを』

「事件はここ裁判所の近くの路地裏で起こりました。被害者の名前は児玉高志、二十歳。傘でひと突きされ死亡」

『《傘》　？』

「これが凶器の傘です。頑丈なもので、先がやや尖っています」

「凶器の傘」

先の尖った傘。血液が付着。糸鋸の左手の指紋がついている。

こんな風にいろんな証拠品が法廷で提出されていく。もちろんそれはぼくの武器になる。

『ふむう

被告人の指紋がベツトリ

』

「それだけではありませぬぞ。現場には被告人の持ち物が落ちていました。2つ提出します」

『受理しましょう』

「赤エンピツ」

糸鋸が左耳にいつもひっかけているエンピツ。

「警察手帳」

糸鋸の警察手帳。

あの2つの証拠品　なにを指しているんだろう。

「では、第1発見者の青木くんを召喚したいと思います」

『わかりました。では係官、入廷させなさい!』

「証人、名前と職業を」

「青木　一郎、大学生です。」

入ってきた証人は若々しい大学生。赤いジャケットが特徴的で、少しおとなしそうだ。

「証人は偶然通りかかったところで被害者と 被告人を見たのですね？」

「はい」

『ではそのときのコトを証言してください』

【証言開始】

あれは8時すぎだったと思います。近道と思って裏道に入ったときに、被告人の姿が見えました。すると、右手に持った傘で兎玉を！

『ふむう 。ところで証人は被害者と知り合いなのですか？』

「あつはい、同じ学部で知り合いです」

『なるほど。では弁護士、尋問を』

尋問。ここでぼくは証人の勘違いやムジンを指摘する。そして真実を見い出す！

【尋問開始】

「裏道に入ったとき、被告人に気づかれましたか？」

「いいえ、でも彼を殺したあとに見られて俺はすぐ逃げました」

「なるほど　そして問題の殺す瞬間ですが。」

「はい、被告人が傘をいきなり前に出して兇玉の腹に刺して　思
わず叫んでしまいました」

「ちなみに　あなたはこう証言しました。《右手に持った傘を》
間違いないですね？」

「え　そうですが　なにか？」

見つけた　証言のムジユン！

「」「」「異議あり！」「」「」

第1章【新たな逆転】裁判パート・2

。

「

」

「

」

『なんですか！！成歩堂くん！！！！』

「い い え！すみません」

（いけない。頭の中が真っ白になっちゃった。）

『で、どうしたのですかな？』

バンツッ！

気持ちを落ち着かせるため、ぼくは机を叩いた。

「いいですか？あなたは確かに見た 《右手》で刺すところを。」

「それが　なにか？」

「ここにその凶器があります、被告人の指紋がついた」

「？」

「しかし、左手なんですよ。着いている指紋は！」

「え？」

証人に少し焦りが見える。

『どういことですか？成歩堂くん』

「単純なことです。このムジユンが一体何を指すのか？」

「待ってください！」

証人の青木が間に入る。

「思い出しました。もう一度《証言》をさせてください」

『わかりました。』

【証言開始】

そういえば　左手だったと思います。兇玉を刺したあと落ちていた自分のコートを右手に取っていたのでつい右利きだと思って　。

『ふむう。それなら仕方ありませんね』

（そんなことはない！きつとまた！）

【尋問開始】

「右利きと思ったのはコートを手に取りるとき右手だったから 間違
いありませんか？」

「は、はい。勘違いしてて」

「そうですか」

「成歩堂くん、もう無駄な尋問はいいかな？」

（亜内検事　！）

「このように勘違いした理由は明白である！」

『その通りですね』

カンッ！

続いて木槌を叩く。

『成歩堂くん、私にはこの証言に問題があるとは思えません。なに
がおかしいのか私たちに教えてください』

（ただ凶器を持っていた手を証言すればいいのに、それがはっきり
しなかった。と言うことは

証人は何かウソをついている!!!)

「確かに被告人の利き手は左です。それは被告人がいつもつけている《赤エンピツ》がそれを証明しています」

すかさず亜内検事が話す。

「確かにそのとおり。しかしそれがなんですか？勘違いしたことに別に問題はないですよ！」

「ここで問題になるのは証人の記憶力になります。裁判長、証人に証言を求めます！本当に現場を見ていたのか。」

「わかりました。では証人、当夜の現場を詳しく話してください。」

「は　はい。」

【証言開始】

あの路地には街灯がなくとても暗いと思いました。人が来ても近くに寄らないと顔がわからないくらい。

『では弁護士、尋問を』

「「待った!!」」

「もう尋問の必要はありません。」

「どういふことかな?」

「証人の言ってることはめちゃくちゃです!」

「なにを言ってるのですかな、成歩堂くん。ここに現場の写真があります。このとおり、現場は暗い!」

『ここならわたしも通ったことあります。2メートル離れると顔もわからなくて。いつも暗いから夜道には気をつけてますよ。』

(裁判長 確かに気が弱そうだな)

「たった今、あなたたちが証明してくれました。」

『?』

裁判長は目を丸くしている。

「当夜証人はただその場を見かけただけではないことを!!」

「「異議あり!!」」

「な 何を言うのかな弁護人。根拠のないことは」

「亜内検事、あなたもわかっているはずです。彼は最初にこう証言

しました。《犯人の顔を見た》と。しかし裁判長がおっしゃる通り、少し離れるだけで顔は見えない！」

「ぐっ　　！」

『証人、どうですか！』

「は　　はあ。なんとも　　」

青木はかなり焦っているように見える。

（とどめをさすなら　ここだな）

「裁判長、弁護側は青木一郎氏を告発します。」

『こ　　告発ですとおおお！！！！』

ざわざわざわ

「「異議あり！！」」

「冗談はほどにしておられますかな？」

「冗談で告発はできません。」

成歩堂は少し微笑むように言う。

『ふむっ、弁護人。なにか決定的な証拠があるのですかな？』

「今までの証言を振り返ってみてください。あの夜道 ものすごく暗いんですね？しかしこんなにも現場の状況に詳しい。と言っているとは！」

証人はただの通りすがりではない！！！！

つまりそれはこの事件に関わりがあるということですよ！！！！」

「異議あり！！！！」

「弁護士、君には説明できると言うのかね？！」

「もちろん。」

（ここまで来たらいいえなんて言えないからな。だけど問題は）

この事件は恐らく次のように行われました。

証人と被害者・児玉高志は路地に入ったところで被害者の腹部に傘を刺した。これが衝動的なものだったのか？故意だったのかわかりません。犯行後、突然の足音。それが被告人です。

彼は焦ったはずですよ。曲がってきたところを突き飛ばし、傘に被告人の指紋をつけて逃走。そして通報したのでしょう。

「これが真相ですよ。」

「」

『

』

法廷中が静けさに包まれる。

「ふっふっふ」

（！）

突然笑い出す青木。

「おもしろい人ですね。成歩堂さんと言いましたか。」

「まだ認めないのですか！」

「あなたはイメージーションが富んでいるようですね。」

『証人？』

「率直に言いましょう。証拠なんてないじゃないですか。」

（あっ！）

冷や汗が垂れる。

「ふっふっふっ 成歩堂くん、終わりみたいですな？」

『どつやら 二こまでのようですね。』

（二こまでかー！）

「そうですね　俺が《突き飛ばした》証拠でもあれば別かもしれ
ませんね？」

青木が見下すように成歩堂を見る。

（突き飛ばした証拠　そんなものあるわけない！）

目の前が真っ暗になる。どうすればいいかわからず、頭を抱えてい
たところに　。

「「待ったああ！！！」」

この声は！

「なるほどくん、もしかしてピンチ？」

微笑みながら話しかけてくるこの少女は　！

「真宵ちゃん！」

「この【綾里　真宵】、しょーこ持ってきたからね！」

綾里　真宵。倉院流霊媒道の霊媒師で、成歩堂法律事務所の《自称：
副所長》。

「しょ　しょー」？」

「なるほどくん忘れたの？ほら、この警察手帳。」

（あっそういえば！真宵ちゃんに警察手帳の指紋調べに行ってもらったんだ）

「で、結果は――！」

「イトノコ刑事の指紋と　　ここによここによ」

（　　――！！）

カンッ！

裁判長が木槌を大きく叩く。

『成歩堂くん！なんなんですか――！』

「あつすみません！」

（珍しくちよつと怒ってるな、裁判長）

「どうしたのかな？」

亜内検事が余裕の笑みを見せる。

「ここに証拠品【警察手帳】があります。」

「ふっ！今となつては意味のない――」

「ここに、ある人物の指紋が付着していました。そう、あなたの

すよ。証人！！」

「え？」

青木は言葉を失う。

「イトノコ刑事、警察手帳はどこにつけていました？」

「胸ポケットに《半分》ぶらさげて」

『半分！』

「ぶらさげて！」

裁判長と亜内検事が続けて言う。

「きっと 突き飛ばすときに手のひらがその警察手帳にあたったの
でしょう どうですか？あなたの言う通り、《突き飛ばしたこと
》を立証しましたよ 証人！！！」

「ぐっ ぐうう ！」

苦しい表情で汗を垂らす証人。

「「異議あり！！」」

「もしかしたら現場に落ちていたのを拾ったのかもしれない！」

「「異議あり！！」」

「そんなことない！じゃあ亜内検事、物を拾うときに指を使わず手のひらで拾うんですか！！」

「ぐぐつ！」

「やったね、なるほどくん！」

（助かった）

『弁護人の言うとおりです。どうですか、証人！』

「くつそおー、成歩堂 ナルホドオ ！！！！！」

証人 いや真犯人、青木 一郎はその場で緊急逮捕された。当夜、犯人と被害者は大学の帰りに以前貸した《金》の言い争いになり、カツとなって傘で刺してしまったそうだ。そしてその場にイトノコ刑事が現れ。

『亜内検事、青木氏は？』

「はい、緊急逮捕しました。」

『よろしい。では、被告人、糸鋸 圭介に判決を言い渡します。』

【無 罪】

『それでは、閉廷！』

カンッッ！

4月21日 午後1時14分

地方裁判所

被告人第2控え室

（ふう なんとか切り抜けたな）

「やったッス！やったッス！アンタはサイコーッス！！！」

「おめでとうございます。イトノコ刑事。」

「あたしがしょーこ持ってこなかったら今ごろ有罪だったかもね。」

真宵が自慢げに話している。

「その通りッスね。感謝するッス。」

「さて、そろそろ帰るか。」

「よし、今日の夕御飯はお祝いついでのみそらーめんだよ！！！」

「えっ昨日も食べたじゃ」

「なあに言ってるの？そんなの関係ないっしょ！」

「ないッス！」

ははは。ったくこの2人は。そんなこんなでこの事件は幕を閉じた。イトノコ刑事はいつもの表情に戻り、真宵ちゃんに手をひっぱられラーメン屋に向かうことになった。

もう4日連続ラーメンだよ、とほほ

。

第一章

「新たな逆転」

終わり

第2章【逆転のみち】探偵パート・1

テレビからニュースキャスターの声が聞こえる。

「今回の特集はあのヒヨッシー騒動で有名になった《ひょうたん湖》のそばに新名所！【ひょうたんヒルズ】を紹介したいと思います。」

6月13日 午前9時06分

成歩堂法律事務所

今朝がたまで雨が降っていたが、その雨もやみ、晴れ間がのぞいている。

ここは成歩堂法律事務所。ぼくはこの所長だ。以前はぼくの師匠【綾里 千尋】がここの所長だった。しかしある事件で千尋さんは帰らぬ人となった。

そして

「おおーっ！なるほどくん、これ見てよ！……！」

テレビを見て騒いでいるのは【綾里 真宵】。一応 ぼくの助手だ。

（一応ってなによ！一応って！）

真宵ちゃんは千尋さんの妹でなんと霊媒師。ぼくは何度もその秘術

を見たことがある。体に霊が宿ると声ばかりか姿まで変わってしまった。

そして真宵ちゃんは2年前に倉院流霊媒道家元になった。

「なるほどくん、はやく来てよ！！」

「朝からうるさいな。」

ぼくは風呂掃除をしていた。

真宵ちゃんに呼ばれテレビのそこへ行くと

「《ひょうたんヒルズ》は、この町のこれからのシンボルとして今日スタートしました。となりにあるひょうたん湖から歩いてわずか10秒！世間の注目を集めています」

テレビに釘付けになっている真宵ちゃん。

「ねえねえ知ってた？ひょうたんヒルズ。」

「なんか建てるのは見たことあるけど、これだったのか。」

「じゃあせっかくだから成歩堂法律事務所を移転して」

「真宵ちゃん、ぼくにそんなお金あるわけないだろう。」

「依頼人来ないしね！」

「うるさいな。」

確かに名前は知られてきているけど、依頼のほうはそれほど増えているわけでもない。

（どうしよう　先月と今月の家賃　）

ぼくが落胆していると真宵ちゃんは続けて

「よしっ、今日はもう事務所閉めてひょうたんヒルズ行こっか。」

もう真宵ちゃんの出かける準備を終えている。

「いいのか　これで　？」

「いいのいいの！どうせ今日も誰も　」

ピンポン

「おっ、誰か来たな。」

「ちえっ　」

（真宵ちゃん、すごく残念そうだ。）

ぼくは急いでドアを開けた。すると

「ウオツフォン！元気かな？成歩堂くん。」

「ほ 星影先生！」

そこにいたのは星影 宇宙ノ介ほしかげ そのすけ弁護士。もう68歳になる。千尋さんが昔いた事務所の上司。いつも落ち着いていて、冷静な判断ができるやり手の弁護士だ。会うのはもう4年ぶりか。

「星影先生！おひさしぶりです！」

真宵ちゃんがすぐに飛んできた。

「ウム、ひさしぶりぢゃな。真宵クンも一緒だったか。」

「はい！ ところで今日は何のご用で？」

「もう知っておると思うが、今日ひょうたんヒルズができたぢやろ？そこに、ワシの友人が探偵事務所をかまえることになってな。」

「へえ ！やっぱお金持ちは違うな。なるほどくと違って。」

「真宵ちゃん、静かに」

ぼくは真宵ちゃんの口をふさいだ。

「フォツフォツ。それで一緒に来てもらえんか？」

「え、ぼくたちも一緒にですか？」

「最近有名になってきたからな。その探偵が会いたがっているのぢ

や。」

「探偵って誰です？」

「笹垣^{ささがき} 午蔵^{うまぞう}と言ってな。ちょうどチミぐらいの年頃ぢゃよ。」

（笹垣 午蔵。名前だけ聞いたことあるな。最近【名探偵】で名を馳せているみたいだけど）

「よし、じゃあ早く行こうよ！」

いつの間にか真宵ちゃんが事務所の階段を降りていた。

「フォツフォツ、真宵くんは行く気満々みたいぢゃな」

（こりゃ完璧行かなきゃいけない空気だな）

「わかりました

じゃあ早速行きましょう。」

「ウム。」

事務所のドアに《休業日》のフダをさげて、ぼくたちはひょうたんヒルズに向かうことになった。

6月13日 午前10時08分

ひょうたんヒルズ

入口

（これまた大きい）

ひょうたん湖の目の前に立つビル【ひょうたんヒルズ】。聞いたところまだ完成したわけではなく、まだ上層階は工事中みたいだ。

「すごい迫力だねえ。こんな大きなビル初めて見たよ。」

真宵ちゃんはビルを見上げる。

「さて、エントランスで笹垣クンの秘書が待っているそうじゃ。」

「なるほどくん、早く行こっ！」

「いつもあの2人は元気ぢやなあ。」

6月13日 午前10時10分

ひょうたんヒルズ

エントランス

真宵ちゃんに手をひっぱられ、ビルのなかに入った。

「すごいよっ！なかは空洞だよ！！」

真宵ちゃんの言うとおり、ビルの中は空洞で、各階回りに廊下がぐるっと敷かれている。

「なるほどくん、ここならいい」

「はいはいはい」

真宵ちゃんが全てを言う前にごまかした。

「さて、ここどこかに笹垣くんの秘書がいるはずじゃ。」

ぐるっと見渡してみると、スラッとした女性がこちらに近づいてくる。

「星影弁護士さま　でございますでしょうか？」

「フム。ワシぢゃ。」

そこに来た女性はきつちりとした服装で、俗にいう『キャリア』のようなひとに見えた。ぼくより少し年上かな？

「わたくし、笹垣探偵事務所、所長の秘書の田所^{たじろ}　宇美^{うみ}と申します。本日はわざわざお越しくださいましてありがとうございます。」

田所さんは深々とお辞儀する。

「いやいや。丁寧な方ぢゃな。こちらは笹垣くんが会いたがってた成歩堂くんぢゃ。」

「まあ、あなたがあの成歩堂弁護士さまで？」

「はい、成歩堂です。あれ？田所さんはぼくのことを知ってるんですか？」

（ほんとに丁寧だな。）

「宇美でいいですよ。いつもご活躍拝見させてもらっています。
ところでそちらの方は？」

宇美さんは真宵ちゃんを見ている。どうやら【格好】が不思議だと思っ
ているみたいだな。

真宵ちゃんはいつも奇妙な和服を来ていて、どうやらそれは霊媒師
のひとが着るもの、みたいだ。

「わたし、綾里 真宵といいます！なるほどくんの“秘書”です！
よろしく願いします！」

（たぶん、ただ“秘書”で言いたかったんだろうな。）

「まあ。こちらこそよろしくね。」

宇美さんはすっかり真宵ちゃんを気に入ったみたいだ。

「さて、笹垣所長がお待ちですので行きましょう。」

宇美さんの案内で高速エレベーターの前にやってきた。少しぼくは
不安になっていた。

「あの 事務所は何階に？」

「60階でございますが なにか？」

「い いえ」

「なるほどくんとどうしたの？」

「ぼく高いところ苦手だからさ。」

そう、ぼくは本当に高いところが苦手だ。一度高さ約10mのところに架かる橋を渡ったが あれはない。

「あんな高い廊下を歩くなんて。」

ぼくはため息をついた。

「ふうん」

真宵ちゃんが不気味な笑みを浮かべている。

《ポーン》

エレベーターの扉が開く、すると。

「　　　うう！！！」

目の前には透明のガラス、そして外が丸見え。

「さあこちらへ。」

宇美さんの誘導でぼくたちはエレベーターに乗った。

「なるほどくんがんばって！」

《ポーン》

高速エレベーターだけあって、60階に着くのは早かった。ぼくに

は長く感じたけど。

「なるほどくん？なんか顔色がミドリ色だよ？」

「ぼくのはほつといて。」

「大丈夫かチミ。」

星影先生が心配そうに尋ねる。

「こちらが事務所入口です。」

案内されたところはビルの内側の廊下ではなく、曲がって外側の廊下に出たところに事務所の入口があった。しかもまた外が丸見え。

「なるほどくんここに事務所かまえちゃいけないね、こりゃ。」

「みたい。」

そこには

『笹垣総合探偵事務所』

と掲げられていた。しかも自動ドア。

「うおっ！勝手に開くとびらだよ！」

「真宵ちゃん、これは自動ドアって言うんだよ。」

「あたしにだってそのぐらいわかるよ！！」

少し膨れっ面になる真宵ちゃん。

（怒られてしまった。）

入ってみると事務所の中はぼくの事務所と同じぐらいの広さで、手前に応接室、奥にドアを挟んで所長室があるみたいだ。応接室にはソファーが2つにすべてガラスでできたおしゃれな机がある。そのほかはと言うと、まだ越してきたばかりのためかまだダンボールがすみに積まれている。

「こちらでお待ちください。所長をお呼びいたします。」

「なるほどくん、気分は落ち着いた？」

「うん、だいぶね。ありがとう。」

「それにしても　　やっぱりきれいだねー！」

真宵ちゃんがソファーにどでんと座り、足をぱたつかせる。

「おいおい、行儀わる」

「元気なお嬢さんですね。」

男が所長室から出てきた。ビシッと決めたスーツにネクタイ。髪は短くサッパリしている。

「あつ、すみません。この子あれで　　。」

「なによあれって!」

「申し遅れました。俺が笹垣総合探偵事務所の所長、【笹垣 午蔵】です。」

（ あれ?この顔昔どこかで ）

「あれ?覚えてないのか。中学の時よくツルんだらろ?」

。

ああああああっ!

「おまえ あの笹垣かつつ!」

「やっと思い出してくれたみたいだな。」

笹垣はふうつとため息をついた。

「なんぢや知り合いぢやったのか!」

「はい。昔よく遊んでまして。こないだ先生が成歩堂の名前を口にしたときは驚きましたよ。」

「だから呼んでほしかったのぢやな。」

「はい、すみません。」

「フオッフオツ。いいんぢやよ。」

（笹垣とは中学のときの同級生。卒業してから一度も会っていないなかつたな。）

それからぼくたちはいろんな話をした。これまでの経緯、探偵を志したとき、中学時代の話。話してる間 真宵ちゃんと星影先生たちはひょうたんヒルズの中を探検しに行ったみたいだ。

6月13日 午後12時14分

ひょうたんヒルズ

笹垣総合探偵事務所

ガチャリ

男が入ってきた。

「先生、そろそろお時間が。」

「おっと、話すぎちゃったな。成歩堂、このひとは馬木うまき 稲介。いなすけうちの所員だよ。」

「馬木です。よろしくおねがいます」

とても落ち着いている人だ。紺のスーツを着て、キツチリとした身

だしなみ。おそらく、これは笹垣探偵事務所のルール みたいなところかな。

「！あなたは成歩堂さんですか!？」

「そうですけど」

「私成歩堂先生のファンで いつも裁判傍聴してます!」

「とんだところにファンがいたもんだな」

「握手 おねがいできますか？」

「あつ、いいですよ」

ぼくは馬木さんと握手した。緊張しているのか少し汗をかいている。

馬木さんは自己紹介を済ませると、奥に行ってしまった。笹垣が時計を見た。

「じゃあそろそろ行くよ。笹垣が元気でなによりだったし。」

「しかし 成歩堂、お前変わってないな。」

「よく言われるさ。」

少し笑ったあとぼくはその場をあとにした。

6月13日 午後12時21分

ひょうたんヒルズ

60階・ろつか

笹垣と別れてぼくはろうかに出た。

「なるほどくん！」

真宵ちゃんがそばにやってきた。

「待たせたね。」

「話長かったねえ！」

「なんせ会うの数年ぶりだからね。あれ、星影先生は？」

「なんか仕事があるとかで帰っちゃったよ。」

「あちゃ 悪いことしたな。」

頭をかきながらエレベーターのボタンを押した。

「ねえなるほどくん、笹垣さんってどんなひとだったの？」

「まあちよつとおとなしいほうだったかな。最初はぼくたち仲良かったわけじゃなかったし。」

「ふーん どうして友達になったの？」

「たしかあれは」

と、話し始めようとしたときエレベーターが開いた。そこには

「おっ！ナルホドーやん！！」

「な ナツミさん！！」

大沢木 ナツミ。自称ジャーナリスト。ずっと前から知り合いで、いつも片手にカメラを持ち歩いている。特徴として、肌は地黒でアフロヘアー。そしてなんと言っても関西弁。

「ナツミさんこんなところでなにをしてるんですか！？」

「スクープあるとこナツミあり や！」

「スクープ？」

「なんだろうね？スクープって。」

「とは言っても別になんかあるわけやないねん。ただのあら探しや。」

「やっぱり」

ぼくと真宵ちゃんはエレベーターに乗った。

「あれ？ナツミさん降りないんですか？」

「いや、もうこの階さっき見たわ。真宵はんたちといたほうが楽しそうや。」

「もうすぐ帰るところですけどね。 て、なるほどくん！」

「 高い。」

6月13日 午後12時26分

ひょうたんヒルズ
エントランス

「こついつとこに住みたいなあ ねっなるほどくん！」

「う うん。」

「ナルホドー、高いとこ苦手なんか？」

「え ええ。気にしないでおいてください。」

ぼくたちはヒルズの外に出た。そしてビルを見上げる。

「何度みても高いねえ〜。」

「この晴れ晴れとしたビルの裏ではいろんなことがあったんやけどな。」

ナツミさんが少しにやけて言う。

「裏 ？」

ぼくがそのことについて聞こうとしたその時だった。

バリーンッ！！

上を見ると火が出ていた。と同時に上からガラスの破片が落ちてくる。

「みんな逃げて！！！」

ぼくが真宵ちゃんとナツミさんを連れてビルのなかに入った。

「あ、危なかった。」

「な　なんや！なにが起きたん！？」

「なるほどくんこわかったよお」

真宵ちゃんが泣いている。

「とりあえず様子を見に行こう！」

「え？なんの？！」

ぼくはエレベーターに乗り60階へ向かった。高さなど気にしてもしられなかった。

6月13日　午後12時43分
ひょうたんヒルズ
60階・ろうか

ぼくは無我夢中で辺りを見渡した。すると火を吹いていたのはこの上、61階だった。

「ふう。」

安心したあと、上の階にはある人影があった。

「馬木 さん？」

どうやら消火活動をしているみたいだ。ぼくもすぐに階段をかけ上がり、向かった。

「馬木さん！！」

「あなたは 成歩堂さん ！」

「ぼくも手伝います」

大きな火災ではなかったためすぐに消すことができた。すこし時間が経って、消防車が下に到着したのが見えた。

6月13日 午後1時

ひょうたんヒルズ
エントランス

「なるほどくん！」

「ナルホドー！！どこ行ってたんや」

「上の火を消してたんだよ。馬木さんと一緒に。あとで警察の取り

調べ」

「おっ、取り調べで思い出したわ」

「そうそう！事件があつたみたいだよ！！」

「火事のほかにも？」

「確か60階で　て警察の人が」

（60階つて、まさか！）

6月13日　午後1時21分

ひょうたんヒルズ

笹垣総合探偵事務所

「待ってよ、なるほどくーん」

ぼくはもう高いところなど気にすることなく事務所に走っていった。

バンツ！！

「笹垣！！！！」

中には横たわる死体　　宇美さんだ。

「きゃあー！！」

真宵ちゃんが叫ぶ。

「こらあ！！勝手に入っちゃダメッスう！！！！」

入った瞬間怒鳴られる。

「あんだなんでここにいるツスカ!!」

「イトノコ刑事! ぼくは笹垣と古い友人で」

「そツスカ。じゃああんだには残念な報告ツス」

まさか とは思った。

「たった今、笹垣 午蔵を田所 宇美殺害容疑で逮捕したツス」

(! ! ! ! !)

「我々が駆けつけたときに、この事務所に横たわるこの被害者と逃げようとした容疑者がいたってワケツス」

「そんな」

ぼくの頭のなかは真っ白になった。やつはそんなことするはずがない いや、出来っこないんだ。だって。

「とにかく! 今日はこの事務所に関係のある者は取り調べを受けるツス。」

取り調べは事務所の関係者だけでなく、ヒルズにいた従業員なども受けた。そのせいか、ぼくも解放されたのが夜8時を過ぎていた。

第2章「逆転のみち」探偵パート・2

6月14日 午前8時46分

成歩堂法律事務所

あれから取り調べがあり、解放されたのは9時前だった。イトノコ刑事によると宇美さんは絞殺されたとのことだった。笹垣はいま留置所にいるそうだ。

「おはよ」

真宵ちゃんが眠たげに部屋に入ってきた。

「あ、おはよう。眠れた？」

「全然。そうだ、早く笹垣さんのところに行こうよ！」

（それもそうだな。笹垣 大丈夫かな）

ぼくたちはすぐに留置所に向かった。

6月14日 午前9時32分

留置所 面会室

「笹垣さん大丈夫かな？」

「あいつは強い男だ、きつと大丈夫」

「そういえばなるほどくん、笹垣さんと仲良くなったときの話してよ！途中だったじゃない」

「ああそれが。あれは」

ガチャリ

「な 成歩堂」

「大丈夫か？」

「なんとかな。こんなこと初めてだからさ」

笹垣は一睡もできなかったみたいだ。目の下につつすら隈が浮かんでいる。

「真宵ちゃん　とか言ったかな？ちゃんと挨拶してなかったね」と、軽く真宵ちゃんと挨拶を交わした。

「笹垣、あのときいつたいなにがあつたんだ？」

「実は俺もさっぱりなんだ」

「え？」

「そう、ちょうどトイレに入ったときだった。事務所の応接室からドサツて物音がしたんだ。その時は気にならなかったんだが行ってみたら宇美ちゃんの死体が　！」

「それで、捕まったのか」

「ああ。だが俺はなにもしていない。本当だ」

笹垣の目がまっすぐこつちを見ている。

「なあ成歩堂」

「ん？」

「弁護を依頼してもいいか？」

「ああ。もちろんだ」

「俺、こんなこと初めてだからよ。いろいろ不安になってさ」

こんな弱気な笹垣は　そう“あの時”。友達になったとき以来だな。

「明日１０時に審理が始まるらしい」

（いつもどおり時間はないってわけか）

「じゃあいろいろ聞くことがある。あのとき事務所関係の人は僕たち以外に誰がいた？」

「そうだな。みんな事務所の移転で荷物をこつちに運んでくることになってたんだ。だからこの事件には関係がないと思う」

「それじゃあ笹垣さんしかいなくなっちゃうよ」

真宵ちゃんの言う通りだ。

「それでもいいんだ。とりあえずあのときいなかった事務所の人の名前教えてくれないか」

「ああ」

貝鳥万寿夫、^{かいとりますお}27歳。事務所設立は彼と一緒にやったんだ。昔からの友人でうちの副所長をやってる。

新田幸、^{にったさち}24歳。

新しく入った新人で、主に事務のことをやってもらっているよ。

剛田充^{こうだみつる}22歳。

こいつも新人だ。主に調査を担当している。俺の右腕だな。

「いまはこんなところさ。なんせ前は小さい事務所だったもんだから少人数なんだ」

「よし、ちゃんと書いといたよ」

真宵ちゃんがメモをしていたみたいだ。

「たぶんみんな事務所にいると思うから、なんでも聞いてみる」

「わかった。笹垣、少しの辛抱だ」

「ああ」

ぼくは笹垣を励まし留置所を出た。

「はやく犯人見つけようね!」

「うん。今日はやることいっぱいあるしね」

6月14日 午前11時23分

ひょうたんヒルズ

エントランス

エントランスには警察があちこちにいます。まだ捜査が終わっていないんだろう。ぼくたちはエレベーターに乗った。

「犯人誰だと思う?」

「まだ話を聞かないことにはなんもわかんないなあ」

エレベーターはどんどん高く昇っていく。もちろんぼくは怖い。でもそんなこと言ってられない。笹垣を助けるんだ。どうしてでも

。

6月14日 午前11時25分

ひょうたんヒルズ

60階・廊下

あいからわず警察が多い。その中にイトノコ刑事がいた。

「イトノコ刑事！」

「おつ来たツスね。なんでも聞くツス」

なぜか妙に表情が穏やかだ。

「なにか嬉しいことでもあつたんですか？」

「なあに、なんでもないツス！」

「ところで被害者の死因はなんですか？」

ぼくは本題に入った。

「どうやら絞殺 みたいツス」

「絞殺 ロープかなんかで？」

「いやそれが、とっても太いもので絞められていたツス」

（太いもの？）

「まだそれが何かは特定できてないツスが とりあえず解剖記録
渡しとくツス」

「え？いいんですか、こんなにあっさり」

「なあに！こないだ裁判で助けてくれたお礼ツス！」

【解剖記録】

氏名：田所 宇美

首を締められ窒息死。

検死はまだ行われていない。

「ありがとうございます！あの 調査はしても」

「いいツスよ！許可するツス。じゃあ俺はこれから捜査会議がある

ツスから」

と言に残し、彼は出ていった。

「よし、とりあえず調べるか」

「なにか落ちてないかな？」

それからしばらくたちは手分けして事務所の中にあるものを調べた。10分が経って真宵ちゃんが声をかけてきた。

「なんにもないよ」

確かに証拠がない。凶器もないし、怪しいところもひとつもない。

「うーん 昨日と違うところでもあればなあ」

真宵ちゃんはソファーに座りこんだ。

（昨日の部屋の様子を思い出すか）

まず事務所に入ると広さ10畳ぐらいの応接室がある。入口は西にあり、入口横の壁に段ボールが積み重なっている。反対の東側は窓ガラスがあり、部屋の中央には全てガラスでできた洒落たテーブルがある。その両脇にはソファー、観葉植物。そして奥には所長室につながるドアがある。

宇美さんの死体は、窓のそばに横たわっていた。そして凶器らしきものはそばにはなかった。

「どうしてなんにもないんだろ？」

「え？」

「不思議だよね。何にもないってのも」

たしかに真宵ちゃんの言うとおりだ。イトノコ刑事なら証拠について教えてくれるはずなのに何も言っていなかった。

「またあとで来よう。まだ会っていない人もいるし」

「うん！」

僕たちはその場を後にし、事務所関係者に話を聞くことにした。

6月14日 午後12時3分

ひょうたんヒルズ

エントランス

警察の取調べが行われているのは1階の会議室だった。今事務所関係者3人が取調べを受けている。

「とりあえず取調べが終わるの待つしかないな」

「もし笹垣さんが犯人じゃないとしたら・・・この3人が？」

「いや、それはわからないよ」

「え？」

「もしかしたら外部の犯行かもしれないし、まだなんとも言えないね」

「うーん、もしかして恋敵の犯行・・・！？」

「・・・んん！？」

「所長の笹垣さんが好きな田所さんにライバルがいて、その人が妬いて殺した・・・！」

「なんでそうなるの！？」

「だって昨日やってた月曜サスペンスで」

「それはドラマだろう！」

最近真宵ちゃんはサスペンスにはまっていて、事務所にいるときもたまに見ている。

「違うかな・・・」

「違う。絶対違う」

「じゃあもし当たってたら1週間ご飯おごりだからね」

真宵ちゃんが小指を出してくる。僕も自信満々に小指を出し指きり

げんまんをした。

カチャツ

不意にドアが開いた。

「あなたたちは？」

女性が姿を現した。

「ぼくたちは笹垣所長の依頼できました、弁護士の成歩堂です。あなたは・・・新田幸さんですか？」

「これはこれは・・・お忙しいところありがとうございます」

そこに立つ女性は宇美さんと同じく礼儀正しい感じが見て取れた。服装は控えめで、唯一ネックレスが目立っている。

「わたしは綾里真宵って言います！」

「よろしくね」

「じゃあ話を聞きたいのですが」

「ここじゃなんですし、そのカフェでいかがですか？」

1階のエントランスにはちょっとしたお店が並んでいて、僕たちはその中のカフェに入った。中は少し混んでいて、事件が起こった後のように思えない。角の席が空いたので、そこに座ることができた。

「このカフェはひょうたんヒルズが建つ前からあって、1回閉店してここにリニューアルオープンしたの。私ここがお気に入りで」

「じゃあ新田さんは以前からここに住んでいたんですか？」

「ええ、ホテルバンドーって知ってます？その横のマンションに住んでいます」

「本当ですか！」

「すごく近いですね！」

「ええ、だから成歩堂さんのことは存じてますわ」

ホテルバンドーは、事務所の向かいにあるホテル。ということは新田さんの家にはものの数秒で行けてしまう。

「そういえば、事件のことを聞きに？」

「はい。昨日のことですが、アリバイの確認お願いできますか」

「昨日は移転の作業もありました。まだ荷物が前の事務所に残っていて、それを運んでいました。お手伝いさんもいるので聞いてみたらわかると思います」

「じゃあ事件当時はひょうたんヒルズにはいなかったってことですね？」

「はい・・・ちなみに前の事務所はここから車で1時間かかるのですぐ来ることは無理だと思います」

「なるほどくん、新田さんは違うんじゃない？」

真宵ちゃんが小声で言ってきた。

「まだわからないよ。とりあえず他の人の話も聞かないとね」

「どうかしましたか」

新田さんが不安そうに言ってきた。

「あついえ・・・そのネックレスきれいですね！」

真宵ちゃんが話をそらそうとする。

「このネックレスは思い出のネックレスなんです」

「思い出の品だったんですね」

「もしかして・・・好きだった人に買ってもらったとか」

「ふふふ、少し当たってるけど秘密よ」

新田さんが笑ってしのぐ。

「いいなあ、なるほどくん買って」

「なんでそうなるんだよ」

それから時間は過ぎて・・・。

「じゃあ僕たちは他の人たちの話を聞いてきます。新田さんは今日

は？」

「とりあえず事務所には入れないので、家で待機します。なにかお話があったら家のほうに訪ねてください」

新田さんに別れを告げ、店を後にした。

「なるほどくん、新田さんっていい人だよきつと」

「うん、ぼくもそう思っけど・・・」

「けど？」

「ううん、なんでもない。じゃあ早く他の人の話聞きに行こうか」

「うん！」

僕たちはまだ会っていない2人にも話を聞くために足早にエレベーターに乗る。

??月??日 ??時??分

????????????

ある暗い一室で2人が話している。

「ヘマ犯してないだろうな」

「もちろんさ、これであいつも終わり・・・」

「あいつ弁護士を雇っていた。一応気をつけるよ」

「わかった」

2人は部屋を後にした。

第2章【逆転のみち】探偵パート・3

6月14日 午後1時

ひょうたんヒルズ エレベーター内

相変わらず外には目を向けることが出来ない。・・・怖い。

「まだだめなの？」

「うん、高いところは、無理」

「やっぱり落ちたのがトラウマなのかな」

実は以前、10mもある橋がくずれて落ちたことがあるのだが。

「いや、その前から怖かったしね」

やっとエレベーターが60階に着く。開いた扉の先にはイトノコ刑事がいた。

「うわっ！」

「イトノコ刑事！ビックリさせないでください！！」

「それはこっちのセリフス！どツスカ、調査のほうは」

「ぜんぜん・・・」

すかさず真宵ちゃんが入ってくる。

「イトノコ刑事」、なんで証拠品とかなんにも残ってないの？」

「あれ？全部回収しちゃったスカね。じゃあ待ってるツス、今持ってくるツスから」

「いいんですか？」

「なあに、先日のお礼ツス」

そう言い残し、イトノコ刑事は去っていった。

「やっぱり証拠品残ってたんだあ」

真宵ちゃんは肩を落とす。

「でも」なかった」よりはいいんじゃないかな」

「それもそうだね」

「それはそうと他の・・・あれ？」

事務所のほうに目をやると赤いものが見えた。それは廊下の床に所々あった。

「これは、血？」

「なんでこんなところにあるんだろ？」

【廊下の血痕】

廊下に点在している血痕。

誰のかはまだ不明。

「いったい誰のかな？」

「それはいま調査中ツス」

「わっ！驚かさないでください！！」

いつのまにかイトノコ刑事が後ろに立っていた。その手にはいくつかのビニール袋を持っていた。恐らく証拠品の入った袋だろう。

「これが証拠品ツス。まずはこのベルトツス」

「ベルト・・・もしかして凶器の」

「そのとおりツス。持ち主は被害者の田所宇美のものに間違いないツス。ちなみに容疑者の指紋が付いてるツス！」

「笹垣の・・・」

【ベルト】

凶器となったベルト。

笹垣の指紋が付着。

被害者のもの。

「他にも証拠品があったツスが、もう持ち出されたみたいツス」

「持ち出された？それっていいんですか？」

「実は・・・」

イトノコ刑事が少し困惑した顔になった。ここじゃなんと、事務所の中に入った。

「実は今年に新しく検察官が採用されたツス」

「それは毎年のことなんじゃないんですか？」

「それはそうツス。でもただもんじゃないツスよ」

「でもそれって毎回のことじゃない？かるま検事さんとか、ゴドー検事さんとか・・・」

狩魔豪^{かるま じゆう}検事。過去40年無敗の経歴を持つ男。いつかの事件では散々苦しめられた。そして狩魔検事には姪^{めい}がいて、その名も狩魔冥^{かるま めい}。アメリカで14歳という史上最年少で検事になり、ぼくを倒すために日本へ渡って来た。

次にゴドー検事。突然検事局に現れた謎に包まれた男。最後にゴドー検事と戦った事件で、彼は真宵ちゃんを救ってくれた。

「確かに真宵ちゃんの言うとおりですよ。御剣はどうしたんです？」

御剣怜侍。ぼくの幼馴染。検事局きつての若手検事として有名になった。有罪のためには裏ではいろんなことをしているという噂も立っていた。

「御剣検事殿はいま海外でご勉強されてるツス！」

「そうなんだ。元気かな」

「もうだいぶ会ってないもんね」

「そうツスねえ・・・ってその話をしたんじゃないツス！新しい検事のことツス！」

そつえばそうだった。ぼくと真宵ちゃんはすっかり昔に浸っていた。

「で、その新しい検事というのは？」

「名前は魔帆夏^{まほか けい}珪^{けい}検事。新人の割にはできるツス」

「魔帆夏・・・？どこかで聞いたことあるよ」

「真宵ちゃん知ってるの？」

「誰だっけなあ、思い出せないや」

「・・・もしかしたら関係あるかもしれないッス！」

イトノコ刑事は大きい声で言う。

「実は魔帆夏検事の服装が真宵さんのと似てるッス」

「じゃあもしかしたら綾里家にかかわりのある人なのかな」

「でも村にそんな名字の人いなかったと思うけど」

「とりあえず後の証拠品は明日の裁判で見るしかないッスね」

「わかりました。ありがとうございます」

「あっそうッス。今日はもう事務所の人に会えないと思うッス。1人は明日の証人として召喚されるッス」

「そんな・・・！」

「なんか行動がむちゃくちゃ早くて我々も苦労してるッス・・・それじゃ」

と言い残し彼は去っていった。明日は大変な裁判になるかもしれない。

「どうする？なるほどくん」

「どうもこうもないね。今日はこれで引き上げるしか・・・」

と思ったが、まだ調べていないところがあった。

「そつえば応接室以外は調べてないよね」

そつだ。まだ肝心の”所長室”を見ていなかった。事件と関係なくとも見ておくか。

6月14日 午後1時11分

笹垣探偵事務所 所長室

所長室にもまだ何もなかった。デスクが1つにダンボールが壁に積み重なり、まだ仕事が出る状態でもないみたいだ。ここは調べる必要もないように思えたが。

「なるほどくん！これ見て！！」

いつの間にか真宵ちゃんがデスクの引き出しを開け、手紙を見つけたようだ。

「ん、どれどれ」

勝手に見るのは少し気がかりだけど、証拠がない今しかたがない。と勝手に思っただけ中身を見た。そこには女性の字独特の几帳面な字が並んでいた。

『私はもうすぐ死ぬかもしれませんが。わたしはいろんな過ちを犯しました。ここで全てを証言したいと思います・・・』

ここから下に1本の切れ目が入っており、セロハンテープで継ぎ接ぎされている。

『明日所長が私を殺しに来るでしょう。いろんな意味で彼に迷惑をかけてきました。でもそれはわたしが元凶なのでしかたありません。・・・』

ここから下は遺書になっている。全ては笹垣が原因と。

「なるほどくん、これって」

「うん。宇美さんの遺書だね、たぶん」

【田所宇美の遺書】

笹垣に殺されるだろうと書かれた手紙。

途中破れていたのがセロハンテープで修正されている。

「これは誰にも見せられないね」

確かに、これが裁判で提出されたら笹垣は確実に有罪になるかもしれない。

「じゃあ今日は引き上げようか」

「明日は大丈夫？」

「まだわからないけど、なんとかしなくちゃいけないのは一緒だよ。とにかく事務所に戻って明日のこと考えないと」

明日はまだ知らない検事が法廷に立つ。とにかく情報を集めなくちゃいけない！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8807a/>

逆転裁判～嘘と真実～

2010年10月12日04時58分発行